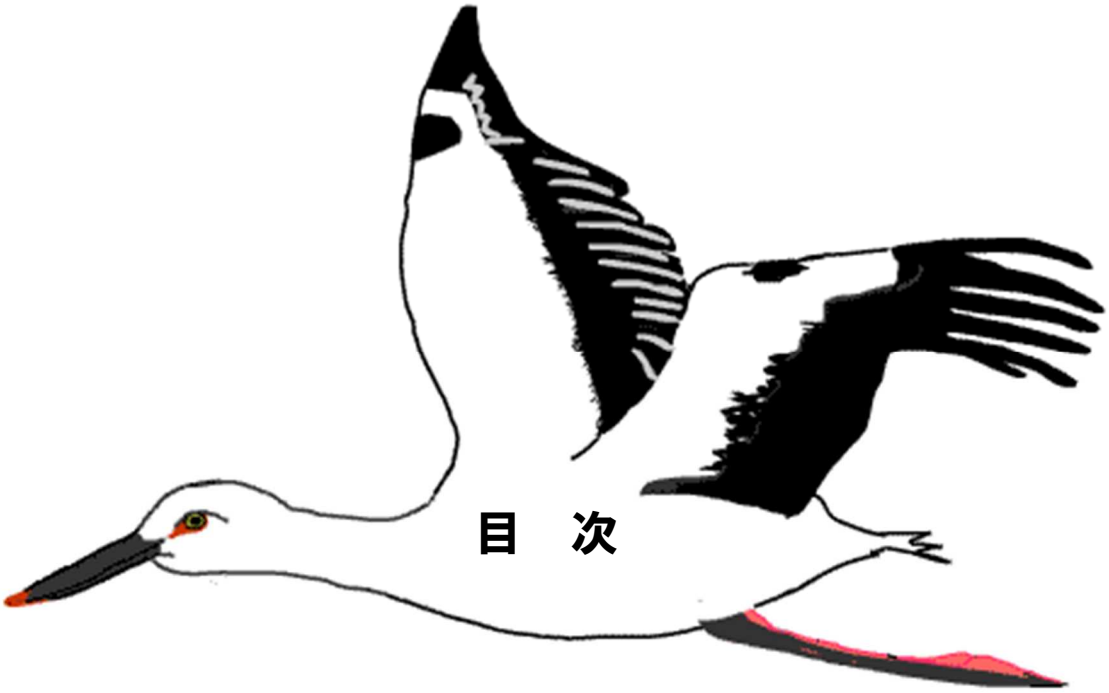
柳生博さん
と
コウノトリ

コウノトリファンクラブ

Fly to the wild



目　次

・年表　1

・柳生博さんの想いでを語る会　8

・柳生会長のことば　23

・写真コンクール歴代最優秀賞作品　24

年　表

柳生博さんには平成 16 年から約 18 年間に渡り、コウノトリファンクラブの会長を務めていただきました。就任後、柳生会長は何度も但馬地域に足を運び、地域の方々と積極的に交流し、熱心に活動されていました。そんな柳生会長と但馬地域との関わりを年表にまとめました。

平成 16 年 12 月　　コウノトリファンクラブ設立総会を開催し、コウノトリファンクラブがスタート　柳生博さんが会長に就任

～設立総会での柳生会長挨拶～
「会長になってください。」と言ってくださった理事の皆さんに、本当に感謝します。一緒にやりましょう。

平成 17 年６月　　・豊岡での田んぼのビオトープ化、冬期湛水稲作、雑木林の復活などの取り組みを取材
・コウノトリ市民研究所主催の田んぼの学校に飛び入り参加し、子どもたちとどろんこになりながら、田んぼの中で様々な生きものたちと交流

８月　　・放鳥を控え、県公館にて井戸知事とテレビ対談

９月　　・コウノトリの試験放鳥
柳生会長も家族ぐるみで放鳥に立ち会った

～柳生会長コメント～
５羽のコウノトリが大空へ羽ばたく姿は美しく、参加者の皆さん方と感動を共にしました。

・放鳥日に併せて第３回コウノトリ未来･国際かいぎを開催
分科会ではコウノトリの故郷ロシアの子どもたちやトキの佐渡の子どもたち、その他多くの子どもたちと自然と共に生きることの意義を語り合った

平成 18 年２月
・豊岡市百合地地区に人工巣塔を贈呈

３月
・豊岡市河谷地区に人工巣塔を贈呈
「人工巣塔をシンボルにコウノトリと共に生きる地域づくりを」と地域の方にエールを送った

・豊岡市出石町三木地区に人工巣塔を設置
ファンクラブ寄贈のプレートを地区の代表の方に手交した

・第１回コウノトリ写真コンクール審査会を実施
最優秀賞『巣作りに励むハチゴロー』
柳生会長も毎年審査に参加

９月
・コウノトリと共生する地域づくりフォーラムの開催
フォーラム後、新たに豊岡市円山川の河川敷で３羽を放鳥し、放鳥式に参加
・放鳥後、第２回こうのとり音楽祭を開催
飛び入り参加で地元の人たちとコウノトリの唄を熱唱
・豊岡市河谷地区でも新たに４羽を放鳥し、放鳥式に参加

平成 19 年
・第２回コウノトリ写真コンクール審査会を実施
最優秀賞『行進だぁー』

６月
・豊岡市を訪問
○百合地地区
ヒナを観察し、元気なヒナの姿を見て嬉しそうにしておられた

○河谷地区
河谷朝市を視察し、地域の人々と懇談（前年には河谷朝市の看板を書かれた）

○コウノトリの郷公園
ふ化からの成長記録を見て、我が子の成長のように喜んでおられた
○山本地区
放鳥予定のコウノトリに餌を与える様子を見学
住民の方と歓談し、再会を約束した
○小坂小学校
地元の小学生たちが参加し、「おかえりコウノトリの会」を開催

「このような素敵な環境の中で暮らせる
皆さんが羨ましい」と語った。

9月

・コウノトリと共生する地域づくりフォーラム開催
「コウノトリと農業への期待」をテーマに生物多様性の環境作りに向けた取り組みをみんなでやっていこうと呼びかけた
・平成 17、18 年に引き続き５羽のコウノトリを放鳥
柳生会長の掛け声に合わせてテープが切られた

平成 20 年

・第３回コウノトリ写真コンクール審査会の実施
最優秀賞『お父さんおかえり』

5月

・コウノトリシンポジウムを開催
学識者の講演や対談を通じて、コウノトリの野生復帰に向けた環境保全の取り組みや、生物多様性の重要性についての理解を深めた
写真家 今森氏、コウノトリの郷公園 増井園長、柳生会長、コウノトリ野生復帰推進連絡協議会 保田会長の４名による対談が行われた

平成 21 年２月

・第４回コウノトリ写真コンクール審査会を実施
最優秀賞『みんなで生態観察』

10 月

・郷公園 10 周年記念式典及び記念シンポジウムの開催
・豊岡市但東町唐川の放鳥拠点付近でコウノトリの記念放鳥とファンクラブ主催のフナの放流を実施
増井園長や柳生会長に見守られながら、２羽を放った

平成 22 年３月　・第５回コウノトリ写真コンクール審査会を実施
最優秀賞『仲間に入れて！！』

10 月　・第４回コウノトリ未来･国際かいぎを開催
「テーマ：野生復帰がもたらすもの～コウノトリが紡ぐ
いのち・地域・経済・文化～」
試験放鳥から５年という節目の年
フィナーレでは、柳生会長がサプライズゲストとして登場し、会場中が熱気に包まれ幕を閉じた

平成 23 年２月　・第６回コウノトリ写真コンクール審査会を実施
最優秀賞『巣立ちの雛に見えたもの』

平成 24 年　・第７回コウノトリ写真コンクール審査会を実施
最優秀賞『明日への絆』

平成 25 年２月　・コウノトリファンクラブのつどいを開催
約 20 名のファンクラブ会員と交流し、コウノトリへの思いを熱く語り合った

・第８回コウノトリ写真コンクール審査会を実施
最優秀賞『師走の好日』
・柳生会長が南但を訪問
養父市伊佐地区、朝来市三保地区を訪れ、地元の方々とコウノトリの野生復帰に向けた取り組みや意気込みを語り合った

６月　・養父市伊佐地区、朝来市与布土地区を訪問し、児童や地元の方々と交流

平成 26 年　・ファンクラブのつどいを開催し、参加者７名と交流
・第９回コウノトリ写真コンクール審査会を実施
最優秀賞『ラージヒルジャンプ』

２月　・育む農法や、里山林整備に取り組む豊岡市相田地区を訪問

７月　・第５回コウノトリ未来･国際かいぎを開催
テーマ「未来へ！～野生復帰のすすめ～」
柳生会長も参加された

平成 27 年２月

・ファンクラブのつどいを開催
参加者 23 名とコウノトリへの思いを熱く語り合い、熱気にあふれた交流会となった
・第 10 回コウノトリ写真コンクール審査会を実施
最優秀賞『花火見物』
・養父市伊佐地区を訪問し、地域の方々と交流

６月
・養父市伊佐地区、朝来市与布土地区を訪問

平成 28 年２月
・ファンクラブのつどいを開催　16 名が参加
・第 11 回コウノトリ写真コンクール審査会を実施
最優秀賞『みんな友達』
・豊岡市田結地区を訪問

６月
・養父市伊佐地区を訪問し、地域の人々との交流

平成 29 年２月
・ファンクラブのつどいを開催　16 名が参加
・第 12 回コウノトリ写真コンクール審査会を実施
最優秀賞『帰巣』

５月
・整備されたばかりの豊岡市の加陽水辺公園の竣工式に参加し、地域の人々と交流

６月
・野外コウノトリ 100 羽到達
・野外コウノトリ 100 羽記念イベントを開催
・試験放鳥以来、全国 47 都道府県でコウノトリの飛来を確認

～100 羽到達及び、全都道府県飛来へのお祝いメッセージ～

平成 17 年に試験放鳥が始まってから 12 年目での快挙となり、
さらに「コウノトリが全国の皆さんの元を訪れる」というこれまで夢見てきたことがようやく実を結ぶこととなりました。大変に嬉しく思います。

平成 30 年２月　・ファンクラブのつどいを開催　12 名が参加
・第 13 回コウノトリ写真コンクール審査会を実施
最優秀賞『星の綺麗な夜』
・コウノトリにゆかりのある豊岡市の久々比神社を訪れ、神主さんの話を伺うとともに、アイガモ農法に携わられている方と交流

６月　・豊岡市小坂小学校にて生徒へ講話
・出石城下町を生かす会の案内で近隣の森井山を視察

平成 31 年２月　・ファンクラブのつどいを開催　12 名が参加
・第 14 回コウノトリ写真コンクール審査会を実施
最優秀賞『歓声』
・養父市伊佐地区の放鳥拠点を訪れ、周辺環境の観察及び伊佐環境保全隊と交流

７月　・戸島湿地内に植樹されたアカマツを視察
・日本コウノトリの会（ＮＰＯコウノトリ湿地ネット）と交流
・養父市伊佐地区の放鳥拠点を訪れ、周辺環境を視察し、伊佐環境保全隊と交流

10 月　・朝来市三保地区の放鳥拠点を訪れ、周辺の水田ビオトープなどを視察するとともに、地域の方々との交流

令和２年６月　・野外コウノトリ 200 羽到達

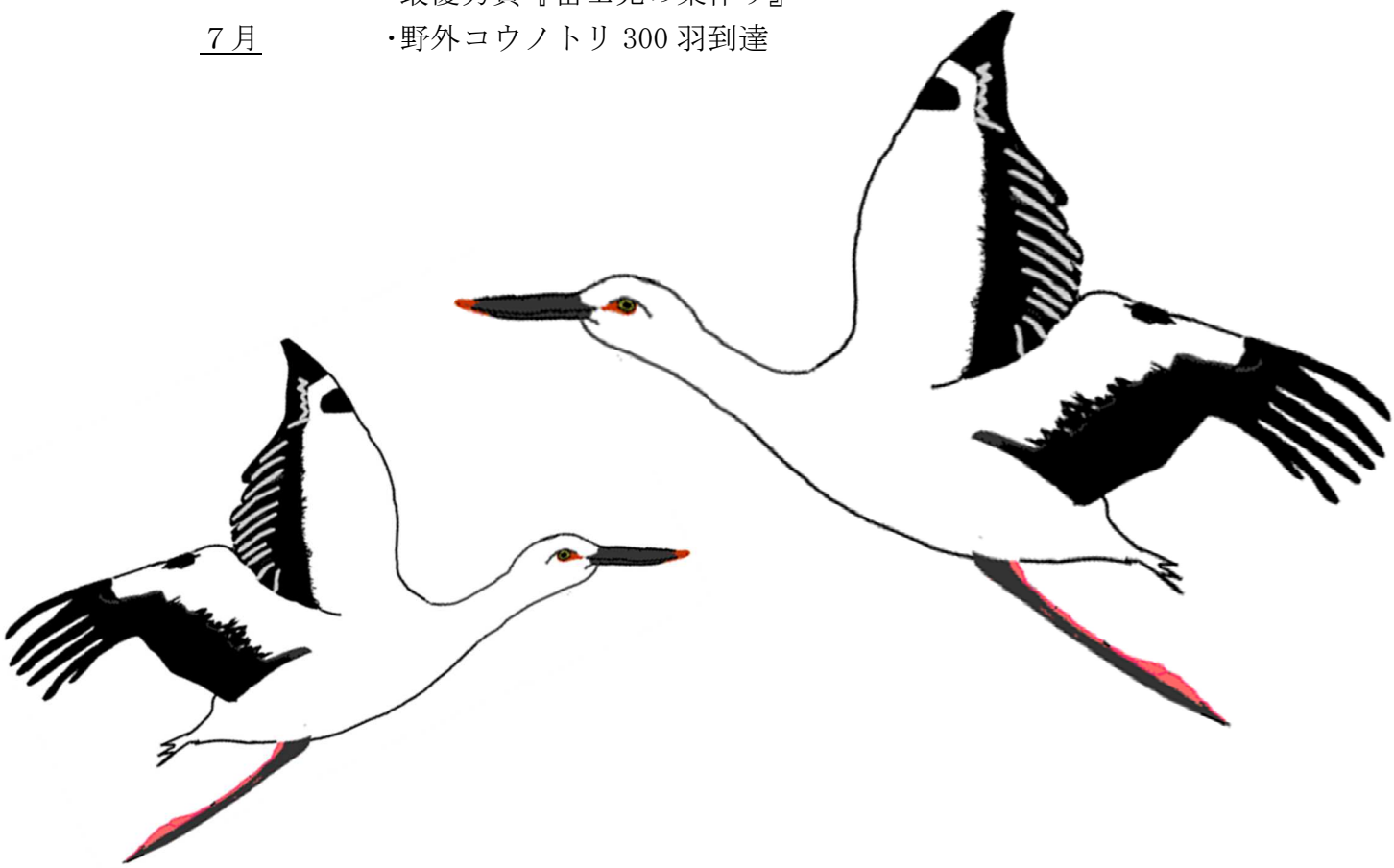
～200 羽到達お祝いメッセージ～

令和２年６月 25 日、200 羽目のコウノトリが京丹後市で巣立っていきました。100 羽到達からわずか３年で 200 羽に到達したこと、大変に嬉しく思います。
今年は、栃木県小山市での東日本初の野外コウノトリの巣立ちや、兵庫県朝来市での市内初の野外コウノトリの巣立ちなど、新しい地域での繁殖が確認されています。コウノトリを受け入れ、共に歩みを進めてきた地域でヒナが産まれたことは、大変に感慨深いものです。

・第 15 回コウノトリ写真コンクール審査会を実施
最優秀賞『こうのとり正月御挨拶』
・野外コウノトリ 200 羽記念イベントを開催
関係６市町による意見交換や、柳生会長と会員の交流を行った

令和３年２月　・第 16 回コウノトリ写真コンクール審査会を実施
最優秀賞『Life or death（生か死か)』
10 月　・第６回コウノトリ未来･国際かいぎを開催
柳生会長はリモートで出席

令和４年２月　・第 17 回コウノトリ写真コンクール審査会を実施
最優秀賞『富士見の巣作り』
７月　・野外コウノトリ 300 羽到達



「柳生博さんの想いで」を語る会

2022 年８月５日
13 時 30 分～16 時
豊岡市立ハチゴロウの戸島湿地

司会　佐竹　節夫

お暑い中お集まりいただきましてありがとうございます。柳生さんが突然亡くなったのが４月 16 日です。ファンクラブの会長でもあったので、県民局と相談した結果、本日の会は日本コウノトリの会で呼びかけをさせてもらいました。本日の進行役も、私・佐竹がさせていただきます。よろしくお願いします。

今日、８月５日は 2002 年にハチゴロウが豊岡にやってきた日なので、毎年この日にハチゴロウを語る会をささやかにやってきました。「ハチゴロウの戸島湿地」は名付け親が柳生さんでしたので、この会も今日が良いんじゃないかと考えた次第です。本日は、これまで柳生さんと関係ある人に呼びかけ、参加いただいています。最初に但馬県民局長からご挨拶をお願いします。

登日　幸治（但馬県民局長）

こんにちは。但馬県民局長の登日と申します。私は柳生さんとリアルで一度、リモートで三度お会いする機会がありました。最初、テレビドラマに出ている方にお会いできるということでものすごく緊張しましたし、逆に嬉しいなという思いでお会いしたのを覚えています。ただ、お会いした時に、初対面なのに 10 年前から知ってるような感じで話しかけて頂き、柳生さんの気づかいというか優しさをしっかり覚えています。今日は私なんか比べものにならないくらい深いお付き合いをされてきた皆様方のお話を伺って、在りし日の柳生さんの姿を偲ばせて頂きたいと思ってます。今日のお話については何らかの形で冊子として残していきたいと思ってます。今日はよろしくお願いします。

司会　３月の 14 日に私も一緒にオンライン会議を県民局でやったんですけど、あの時元気でしたよね。先日もマネージャーの方と話してたら、あの時 14 日が人生最後の仕事だったんだって言われました。こんな早いとは誰も思ってませんでした。今日はこういう会ですので特にシナリオは用意していません。自己紹介は発言の時に名乗りながらやってください。それと紹介しとき

ますが、配布しているペットボトルのお茶のラベルが柳生バージョンです。コウノトリの会の森薫さんが作ってくれました。

もし、可能でしたら、ご遺族の方も来られませんかと打診したのですが、８月はめちゃめちゃ忙しいので残念ながら無理だという事でした。また、松島興治郎さんにも声をかけましたが、６月に熱中症になられて後遺症が続いているらしくやむなく欠席です。読売新聞の松田聡さんも参加予定だったんですけど仕事で来れなくて、メッセージを頂いてますので後で披露したいと思います。

それでは、忌憚のないありのままを言っちゃってください。最初に、豊岡での柳生さんの映像を県民局が編集されていますので、それを鑑賞しましょう。

〈映像鑑賞〉

司会　皆さんの想い出を聞かせていただく前に、先日、八ヶ岳倶楽部としての柳生さんを偲ぶ会があり、中貝さんが参加されましたので、その様子を報告していただきましょう。

中貝　宗治（前豊岡市長）

７月 30・31 日にセレモニーというか、八ヶ岳倶楽部として偲ぶ会がありました。八ヶ岳倶楽部は里山風景の中にあって、そこにカフェがあるんですけど、その森の中にある小さい建物の中で柳生さんの写真のあるところに、「献花」じゃなくて「献枝」、木の枝をお供えしました。森の中に「パパの石」があり、「人と自然・仲の良い風景・八ヶ岳倶楽部　木たち鳥たちスタッフたちにまた会いに来てください。パパこと柳生博 2022」と書いてあります。

これ柳生さん自身の字だそうです。次の日、朝７時くらいに行きまして、まだ閉まってましたけど、誰も居ないので森の中を歩いていると、柳生さんの気配が非常に強くしました。一緒に歩いてると「ここにカタクリの木があって、カタクリというのは陽が当たるだけじゃダメなんだ。木漏れ日が凄く大切なんだ」みたいなことを言ったり、「どうだ、これはオレが作ったんだ」という自慢をされてましたけど、柳生さんの気配を強く感じました。柳生さんのお墓は、ちょっと離れたとこにあります。僕たちが 30 日の午後に行った時は、誰かがビールをお供えされてました。

それからこのセレモニーの時に、５分以内のビデオメッセージが欲しいというふうに言われまして、いろんな人が撮られました。セレモニーは３人だけ、一人はフィギュアスケートの安藤美姫さん、それから僕のメッセージが流れて、３人目が俳優の非常に味のある平泉成さん。あとは凄く近かった人のリアルな挨拶が２人あって、柳生さんが好きだったイマジンの演奏があって終わりという感じでした。その時に流してもらったメッセージがこれです。

【ビデオメッセージ】

「柳生博さんと縁の深いコウノトリの郷公園から、兵庫県豊岡市の中貝宗治です。31 年間コウノトリの野生復帰に関わってきました。最初の 10 年間は県会議員として、次の 20 年間は市長としてでした。そのほとんどの時間を柳生さんは野生復帰の応援団長でした。僕は柳生さんと初めてお会いしたのは 1994 年に開催された「コウノトリ未来国際かいぎ」でした。司会として柳生さんは登場されました。閉会イベントの終わりの方で、当時文化庁の調査官で、そして国際かいぎを実質仕切っていた池田啓さんを壇上に引っ張り上げました。「おい池田さん、一体いつコウノトリを空に放すつもりだ。」柳生さんの勢いに押されて池田さんはつい「10 年後」と答えてしまいました。池田さんはその後文化庁を辞めて豊岡に移り住み、コウノトリの郷公園研究部長として野生復帰プログラムを仕切ることになります。実際放鳥されたのは 11 年後 2005 年９月のことでした。2010 年の４月に池田さんが病で亡くなったとき、「中貝さん辛いね・・・」本当に辛そうに柳生さんがおっしゃいました。柳生さんも僕も本当に辛かったです。その後も折に触れて池田さんの思い出話をしました。「オレがあの時、いつ放つんだと問い詰めたので池田さんはついうっかり 10 年後と言っちゃったんだよな、でもまあその通りになったよな」と懐かしそうに話されたものでした。

その３ヶ月後には今度はコウノトリの郷公園の園長だった増井光子さんがイギリスで落馬事故で亡くなりました。柳生さんから電話がかかってきました。「中貝さんくじけるなよ！」それから１時間以上話し込みました。

2020 年６月に日本の野外のコウノトリが 200 羽を超えた時も電話がかかってきました。「中貝さん、２００羽ってすごいなあ！嬉しくってワイン飲んでご機嫌なんだ！」それからまた２時間話し込みました。辛いときには励ましてもらい慰めてもらい、嬉しいときには柳生さんと心が共振してさらに嬉しくなる、一層元気になる。本当に素晴らしい応援団長でした。

柳生さんからの電話というのは大抵夜の９時以降でした。最初の 40 分くらいは僕がお相手をして、それでもなかなか終わりそうにないので、その後は妻にバトンタッチをして、それから 30 分以上話し込む。そういった電話でした。９割以上は柳生さんがひたすら話をしておられました。

心残りなことがあります。柳生さんと一緒に撮った写真が酔っ払った時のものばかりで、シラフの時の写真が一枚も無い事です。近すぎて一緒に写真を撮ることが恥ずかしかったのかもしれません。

今年はおそらく日本の野外のコウノトリは３００羽超えるだろうと思います。でももう柳生さんから電話は多分無いだろうと思います。まぁそれでも柳生さん、その時は一緒に乾杯しましょ

う。

テニスコートにいる二人のプレイヤーは球を打ち合っている限りは決してコートを離れる事はないといいます。柳生さんは現実にはコートを離れてしまいましたけども、それでもこれからもやっぱり心の中で球を打ち続けて行くんだろうなと思います。

いつもいつも、愉快で陽気で楽しいお酒でした。長い間、本当に励まし続けて頂いてありがとうございました。ご冥福をお祈りいたします。ありがとうございました。

司会

それでは、これからは順番に柳生さんとの思い出を語っていただきたいと思います。本日の出席者の中では、柳生さんと最初に出会ったのは私と思いますので、私から。

平成６年に第一回のコウノトリ未来・国際かいぎをやったんですけど、５年の内部協議で二部形式とする、一部はシンポジウム、第二部はワイワイとやるという風に決まりました。じゃあ二部の司会を誰にしようとなって、文化庁の池田さんに相談したんですね。その当時 NHK で「生き物地球紀行」をやってましたので、そこのプロデューサーに相談するのがいいんじゃないとなってその足で NHK に行って相談したんです。そこで柳生さんを推薦してもらいました。ありがたかったのですが、行政の予算も限られていたので、柳生さんなんて有名タレントを呼んだらギャラが凄いんじゃないかって心配しました。「どれくらいですか？」って尋ねたら、NHK は紅白歌合戦でも超一流でも低額だと聞いたので、それなら可能だと思ってセッティングお願いしました。後日、NHK の食堂で直接お会いして口説きました。その時、例の出石川のコウノトリと農婦のポスターも持参していたので、(農婦の) 角田さんが言われたことなどを話したら、即乗ってきてもらって「やろうやろう」ってすぐ OK を頂きました。

その後、コウノトリの郷公園がオープンして記念のシンポジウムがじばさんセンターで開催されることになったのですが、鳥取空港まで迎えに行く役を引き受けました。公用車がなかったので、県が手配してくれたタクシーで行くこととなり、帰りの道中でいろんなことが話せました。その時に柳生さんが言われた印象的なことがあります。先日東京で子どもらを田んぼに入らせたところ、一人が「懐かしい」って言ったんですって。田んぼに入った事が無く、初めて入るのに「懐かしい」と。これはひょっとしたら農耕民族の血っていうか DNA が言わせたんじゃないかっていう話をされたんですよ。そしてその話を、本番のシンポジウムで増井園長に「これ、どう思う？科学的に判断して DNA がそう言わせたんじゃないか」って。そうしたら、増井園長が「それはそうだと思います」って話になりました。そういうやりとりや思い出が繋がって「たしかな未来は懐かしい風景の中にある」ということが柳生さんの中に確立していった、そう思いました。

では、改めて中貝さん、お願いします。

中貝　宗治

国際かいぎの時にはあんまり柳生さんとは接点なかったんですけどね。それでいつだろ？柳生さんが田んぼの学校で豊岡に来られて、祥雲寺の田んぼで子どもたちと喋ってる時に、スッポンガニ、若松葉。あれが1匹400円くらい、安くて20匹くらい買って郷公園に持って行ってそこで茹でて。手土産に持って行ったら「君は何者だ？！」って。20匹のカニが届いたので、若松葉なんてものは知らないのでものすごい高級なものを20匹も持って来たって。

以来、親しくなりました。この後に、ファンクラブができた時に、柳生さんが会長で増井光子さんと僕が副会長。そうすると盛んに「会長はえらいだろ。この中貝さんと増井さんを副会長にしてるんだ」とよく話をしておられましたね。

イカと豆が好きなんですよね。イカの刺身を食べながらとにかく飲んで、ということなんですけど。嫌いなものがトマトです。そのことをうっかり忘れてたのか気がつかなかったのか、友達がすごいステキなトマトをくれて。高級チョコレートのような箱に入れて八ヶ岳に持って行ったら変な顔してるの。別便で送ったイカはすごく嬉しそうに「中貝くん二人で食べよう！」って言ってたのに、トマトは横に置いたまま全然で。あとで聞いたらダメなんだって。柳生さんとの関係では最大の失敗でしたね。でも行くと、夜お酒飲んで皆さんも付き合った事あるでしょうけど、長いんですよね。もう12時過ぎて1時になっても2時になっても。豊岡で飲むときなんかは県民局の担当者が大体犠牲になって、二次会三次会に付き合ってヘロヘロになった人をホテルまで送るってことでしたけど、僕は一次会でサヨナラ。このあいだ八ヶ岳に行っていろいろと話をしてると、NHKの小野さんっていう「ダーウィンが来た」のプロデューサーやってた人なんですけども、聞いてると小野さんも八ヶ岳に行くと「さぁ飲もう！」って飲んでて、そのうち「若いやつも呼べ！」って言うんですけど誰も来ない。行くととにかく話は長いし時間も長いので。最後は息子の妻が一人犠牲になって顔出して延々と酒を飲んだということをおっしゃってました。とにかくすごく酒が好きな人だったですね。

柳生さんの調子が少し悪そうだよって聞いて、僕は4月の21日に行こうとしていました。4月20日に岐阜県の可児市ってところに演劇のまちづくりでシンポジウムで招かれていて、すぐ近くなので。で21日に行くことにしたんですけど、その前に電話をしてみると、お孫さんが「もういつか分からない」とおっしゃって。でも今なら本人が話が出来ますって。私はこれから八ヶ岳に行くのでって電話を取り次いでもらって。21日に行くと言ったら、「おう、待ってるよ」とおっしゃいましたけど、声は大分その頃弱かったですね。で、21日が近づいてくるのでその直前に15日かな、NHKの小野さんに連絡入れて。小野さんはお孫さんと近かったので、率直なところ本当に行っていいのか、行って迷惑だったら行かないし。僕が直接だと言いにくいだろうから小野さん聞いてよ、って言ったら、その直後に亡くなりましたって連絡がありました。ギリギリのタイミングで声が聴けて良かったです。

今、コウノトリは、イスラエルのエコロジストのラン・レヴィ・ヤマモリさんという方がすごく熱心にイスラエルの国内でコウノトリの映画まで作って、流して、大学で豊岡のコウノトリの話をして世界中で招かれて行って話しています。このランさんとの繋がりも、2010年くらいに東京の神社関係者の勉強会に柳生さんと僕が招かれてた時にラン・レヴィ・ヤマモリさんが来てたんですね。“ヤマモリ”と付いてるのはパートナーが日本人なので「ラン・レヴィ・ヤマモリ」さんとおっしゃるんですけど。ギリシャとかパレスチナとかの森の周りを回りながら生きてる鷲がい

て。これが危機的な状況にあって保護活動しないといけないんだけど、お互いに戦争やってる相手なんで関係者が集まることができない。それを安田喜憲さんという人が・・花粉分析なんかをやってる人で、花粉を調べるとその頃になんの植物が生えていたか分かった。で、例えば地中海あたりは杉の森がうっそうと生えていた事を突き止めた人なんですけども、その人がその話を聞いて、「日本は八百万の神の国なので、日本に来れば一緒にやれば良いのだ」という話をしてランさんを招いたんですね。残念ながら他の国の関係者は来れなかったのでランさんだけだったんですけど。ランさんと柳生さんと僕はその時講演をして。ランさんは豊岡のことも知ってたんですけど、彼は驚いて。何度も何度も豊岡に来るようになってきてそれを映画にしたりだとか。
その映画は今、英語・フランス語・ドイツ語・ロシア語・ギリシャ語・スペイン語・イスラム圏の国の言葉、７カ国くらいに訳されて Youtube で公開されてる。その人の繋がりも柳生さんが一緒だったなと思います。要所要所で一緒に歩んで来た、そんな気がしますね。

司会　県民局のコウノトリ翔ける地域づくり担当の初代の事務局だった大西さん、よろしくお願いします。

大西　信行（元但馬県民局）

みなさんこんにちは。私と柳生さんの関わりは、やはりコウノトリファンクラブを作ろうと言うことでどなたが会長に良いんかなということで、お二人からご推薦頂いてお願いして会長になって頂いた経緯がございます。元々コウノトリの野生復帰計画はずっと前からあるんですけど、実際に放鳥するという話が１００羽近くなるだろうということで、私が但馬県民局に来ましたのがちょうど 2000 年です。2000 年の４月です。それで初めはコウノトリというよりは但馬県民局の地域ビジョン参事として、２年間但馬地域づくり計画をしました。その時のテーマを、コウノトリと共生する地域づくりとして２年間やらせて頂いて、その後コウノトリの実際に野生に戻してどのように地域づくりするんだということで長い名前なんですけど、「コウノトリ翔ける地域づくり担当参事」という名前を頂きまして、担当させて頂きました。
今日もここから見てるとそこにコウノトリがいて飛んでる風景、本当に凄いなと思ってさっきからずっと見させて頂いてるんですけども。2000 年頃っていうのはとてもまだ放鳥もしてませんしそんな状況じゃございませんでしたので、こういうことになるだろうという豊岡市さんの熱い思いも受けながら担当させて頂きました。
本当にまずは地域の方々にいろいろご相談させて頂いて放鳥する事が大事だなと思ってましたけど、あの当時から思いますとやはり放鳥することに関しますと農業者の方々が一番関係しますので、よくご相談させて頂きました。地域には夜な夜な佐竹課長さんと一緒に出向いて行きました。どういう課題があるのかという話をさせて頂きまして、実際田んぼに下りると、ちょっとそういう被害もあるんじゃ無いかなという話もあったんですけど、ここのハチゴロウの話、野生復帰計画を作ろうということで平成 14 年に野生復帰協議会というものを作りまして、たしか発足させて一回目の会議が平成 14 年の８月６日だったんです。その前の日にハチゴロウは郷公園に飛来したということで第一回目の会議に新聞記者来てるんですけど、その話をすることから始

まりまして。そういう発表してますと、県民局の会議室の外にハチゴロウは飛びましたね。あれには驚きました。会議始めたとこに、窓の所にハチゴロウが飛んだっていうので新聞記者がみんなシャッター切りまして。凄い偶然があったな。でもそのおかげで実際に田植えした時に、コウノトリがどういう風な行動するのかなってことも郷公園の方々やボランティアの方々らと一緒になって追跡調査しますと、そんなに全然そういう踏み荒らすようなこともないし、餌を啄むときにちょっと当たるくらいなもんで、そんなものは被害でもない。それで安心したのがハチゴロウの奇跡かなと思ってますけど。それがなければ本当に実証できないので被害が起きたらどうするという話しもありました。そういう事も含めて検討しろと知事が言われました。その経緯の元で報告しますと、平成 17 年に放鳥するにあたって全国に飛んでいくだろうと。そしたら県内だけじゃ無くて全国の方々に地域づくりはみんなでやるものだから知って頂こうと。そのためには全国の人たちに普及する会員になってもらって PR してもらったらどうか、ファンクラブを作るという命を受けまして。会長は有名で、造詣の深い方にということで、市に相談しまして、野鳥の会の会長もされてましたものですから柳生さんということで。そういうことで柳生さんになって頂きました。放鳥の前の年の平成 16 年ですね。さっきお話もありましたように設立の総会で会長になって頂き、それからいろいろ普及啓発で、柳生さんが会長になってアピールしたことにより、全国に周知、非常に協力して頂いたと思ってます。ちょうど放鳥の年は愛知万博の年でした。環境をテーマにした万博でしたのでコウノトリの展示もさせて頂きました。それの映像を作ろうということで NHK のスタジオに行きまして、柳生さんが映像のナレーションを語って頂きました。その前に生き物地球紀行でやっておられましたからその再現のようでした。それが全国に飛び立っていくコウノトリの応援になったのではないかと思っております。実際平成 17 年の放鳥する時には秋篠宮殿下をお迎えして柳生さんと橋の上から、飛んで行くコウノトリを見させて頂きました。平成 18 年の４月には私は県庁へ戻ったものですから柳生さんとは短い期間でしたけども、放鳥した後、コウノトリがどういう行動をするのか読み切れないところもあり、年が明けて平成 18 年の２月頃、百合地の田んぼの電線の上に巣を作り出したものですから人工巣塔を建ててはどうかと。これは郷公園にも相談しましたけど自分で作った巣を勝手にこっちに持って行かれるとなかなかそれは無理じゃないですかねというお話はありました。ただこういった事業は即実行しなければならないのですが、県の予算の場合時間がかかり、なかなかスタートできません。そこで思いついたのがファンクラブです。会費として皆さんに納めて頂いておりましたからこの会費を使わせて頂いて人工巣塔を建てさせてもらったらどうかと。柳生さんに電話をしましてその旨を伝えますと、いいじゃないか、すぐやりたまえと。百合地の方に人工巣塔を建てました。本当にコ

ウノトリがそっちに下りてくるのか半信半疑でしたけど、コウノトリが来て、その時は孵らなかったですけど産卵しましたね。自然を相手にしてる事業はそんなにきっちりいかない。池田さんは「ガチガチの計画作って飛ばしていくのは違うよ」と自然が相手だから放鳥したあとどうなるか見極めて変えていったらいいんですよと。その言葉頂いてから気が楽になりまして。こちらの湿地を作る話も戸島にハチゴロウが下りてきた話も柔軟に対応されてたと思いますけど。柳生さんがいつも言われていたのは里山の保全・復活ですね。日本には田んぼ、小川、雑木林、そこに人が絡まって里山が出来てるんだと。豊岡に来ると懐かしい風景が蘇ると楽しみにされてました。先程出た飲み会の話では、県の担当は私がさせて頂いてました。送迎や宿のお世話、気さくに喋って頂けるので全然苦にもなりませんでしたしお話もさせて頂くので楽しんでやらせて頂きました。ファンクラブは地域の方に積極的に参加してもらおうということで写真コンクールをして、毎年審査員として但馬に来て頂くという機会を設け審査して頂きました。放鳥した鳥が全国に飛び立って行きましたけど、日本野鳥の会が追跡のデータを協力して頂きましたので、柳生さんを会長にしてファンクラブ活動ができたのが良かったんじゃないかと思います。今コウノトリ 300 羽、当時は５羽放鳥する中でどうなんだろうなとやって来ましたけど、今は地域の人たちの熱い思い、すごい歴史の中で頑張っておられますので。私も県職員として６年おりましたけどみなさんは地域でずっとやっておられますので継続していくことが大事だと思います。自然の風景の中にコウノトリがいるというのが嬉しく思っております。

司会　　次は豊岡市の宮垣さん、よろしく。

宮垣　均（元豊岡市コウノトリ共生課）

コウノトリ育む農法を担当していた頃、柳生さんに怒られたことがあります。でも、それはコウノトリ共生課にではなくて、農林水産課でした。初めて東京出張に行って野鳥の会の理事の方と懇談会を持ってもらい、理事の方が 10 人くらい出席される中で、農林水産課の梶原君も参加していました。会が終わった後に柳生さんが近づいて来られて、「おまえらコウノトリの餌場を用意するんだな？」と梶原君に凄まれた。梶原君は「僕が？」って感じで。「もっとしっかりしろ」って活を入れられて。最後に「おまえがやるんだな？」「はい」って言わされていた。それが最初の印象に残ってる姿です。私たち市職員に対して、コウノトリに責任を持ってやれってよく言われたなぁと思いだします。その後、中貝市長から言われてコウノトリの本を佐竹さんの後に書いたんですけど、出来上がった時に第５回目の国際かいぎの後直接柳生さんに渡しました。すると、「よくやった！」と一言言われた。僕の中では褒め言葉として残ってます。コウノトリ未来・国際かいぎは、第２回目から携わって計５回経験させてもらいましたが、エンディングといえば柳生さんだったんです。こないだの第６回もオンラインででも出てくださいってお願いしたんですが・・・。もし、次の国際かいぎがあれば、エンディングは誰がやるんだろうなと。エンディングは柳生さんにまかせとけば綺麗に終わっていくって感じがしていましたので、そんなことができる人は誰がいるんだろうなと思っています。

しんみりしてしまいましたけど、いつも元気を与えてもらっていた存在だなと。昔は夜遅くまで飲みに行ってグデングデンになる姿も何回も見たことあります。以上です。

（大迫さん到着）

司会　大迫先生が来られましたので、柳生さんとの思い出話をお願いします。

大迫　義人（コウノトリの郷公園）

郷公園の大迫です。柳生さんは誰しもが知っている有名で味がある俳優ですが、以前から柳生さんが味のあるナレーションをされていたNHKの「生き物地球紀行」が好きで見ていましたが、すごく魅了されたのを覚えています。柳生さんと直接会うようになったのは2005年、野生復帰を開始したコウノトリ未来・国際かいぎの３回目のときからです。僕にとっての思い出の一つが、１番目と２番目の娘が生まれた時に柳生さんに抱っこしてもらった写真です。パパが若いときに柳生さんっていう人と知り合いになって、その人が全国にコウノトリが有名になる形にしてくださったという自慢話をしようかと。さんまさんの番組の中でも、柳生さんがコウノトリの話を一生懸命PRしてくださったのも印象に残っています。こちらにいらっしゃるかどこかで講演されるとなるといつも僕に電話があって、今の全国のコウノトリはどうなってる？とお尋ねになりました。ファンクラブの会長でもありましたから喜んで新しい情報をお伝えした覚えがあります。豊岡に来られるたびに僕も飲み会に行きました。怒られた事もありますけど、元々優しい人ですからお話をさせてもらってますます柳生さんの魅力にハマりました。僕も来年定年でリタイアするのですが、柳生さんの代わりにコウノトリの野生復帰を全国にお伝えしていって、兵庫県や豊岡市がユニークな事を取り組んで少しずつですが成功に向かっていることを広げて行こうと思います。今日はどうもありがとうございます。

司会　先生は来年の３月末で鹿児島に行かれてしまいますので、コウノトリの話や知識を聞きたかったら今のうちにコウノトリの郷公園に訪問してください。では地元編に移りましょうか。コウノトリの郷公園は祥雲寺ですので、畷さんから。

畷　悦喜（祥雲寺地区）

柳生さんとの思い出は、懇親会が居酒屋でありまして。前に松島興治郎さんがいて僕と柳生さんがいて、「この３人の中で誰が一番年寄りだ？」「あんたが一番年寄りだ！」とお互い言い合い、大笑いしたことがあります。もう一回は、国際かいぎの時にマグネットにサインしてと言うと「こんなものに書けないよ」と叱られました。マズかったなと。

コウノトリと農業との関係なんですが、どういうふうな形で共生していくのか、どう農家をまとめるかが悩みでしたし、やりがいもあった。とにかく農業については何とか有機農業を始めたい、自分たちが一番安心なコメを作って行こうと

一心だった。
(暖さんが持参されたアボシメロンほか３種類のウリを全員でいただきました。大変おいしかったです。ありがとうございました)

司会　では、河谷の岡さん。

岡　治（河谷地区）

私の方からは、「コウノトリだより」というブログの中から思い出の写真を持ってきました。写真を見ながら話します。これは一番最初に河谷にお見えになった 2006 年３月の写真です。いつ撮ってもこの笑顔、柳生さんスマイルだなと。次は地区内に巣塔を設置した時。次は少し雨の中、皆さんでおいでになった時の写真です。その同じ日に、朝市の看板を書いてほしいとお願いし、河谷会館で書いてもらった時の写真です。銀杏の木の板を用意してそれに書いてもらおうとしたら、一回練習させろと言われ、用紙を取りに帰りまして白い紙を木の上に乗せて書いて頂きました。「コウノトリの住む郷・河谷朝市」と書いて頂きました。さあ、次は木に直接にと思いましたら、写真家の宮崎学さんが来られたので、「もうこれでいいじゃないか」ということになりました。結局、木に文字を写すのがお金がかかってしまった。これが出来上がったものですが、なかなか味のある看板です。その後、劣化したものですから文字を彫刻刀で彫りました。次の写真は、2006 年９月に河谷放鳥拠点から放鳥した時に NHK の番組の収録でお見えになったときのものです。この日は新田小学校で地区の運動会があり、

大人や児童がたくさんいる式典で柳生さんのメッセージが。「河谷のみなさーん、新田小学校のみなさーん」と大きな声で言って頂きました。次の写真は放鳥拠点の様子。このときに放鳥したのが百合地の巣塔で最初の繁殖となりました。次の写真は、大迫さんの娘さんと奥さんのお母さん。次の写真は写真展で入賞した写真を河谷の朝市に貼らせて頂いたとき。「全国に無農薬栽培をしてる仲間がたくさんいるよ」「コウノトリが表彰状を持って全国に行くよ」と、そんな話をされたのがこの時だったと思います。これは新田小学校の収穫祭の時にお見えになったとき。柳生さんは真ん中あたりに写っています。これで終わりです。

前田　稔（伊佐環境保全隊）

前田と申します。３年ほど前に来られたときの写真を持ってきました。皆さんが言われてるように、お酒が好みで、「一緒に飲みたい」と言われてたんですがその機会がなく、飲むチャンスは無かったです。接していましたら短気な方で、意見が合わないなと思うと「お前何言ってるんだ」と。柳生さんの声を初めて聞いたのは皆さん言っておられる生き物地球紀行でドイツのコウノトリの放送があった時のナレーションをされてた時に初めて意識しました。一回目に来られた時にその話をしたら「お前よく覚えてるな～」と言われて。何回か来られたんですけど特にこれと言って一つ一つ説明することは無いんですけど、親しく接してもらったなと。次の写真、これは放鳥拠点近くで餌場づくりの映像でして、伊佐は昔はサギがほとんど居なかったんですけど今はたむろしています。エサがあると真っ先に来るのがサギです。田んぼの中で生き物が多くなると、田んぼに 20 羽ほどのサギが最初に来る。ある程度エサが無くなったらコウノトリが来る。サギもテリトリーがあるみたいで他のサギが来ると追い払いをしてるような感じです。この場所に伊佐小学校がありますけど、柳生さんにお話して頂いて、子どもたちもスゴいなあと聞いておりました。

加藤　文男（伊佐環境保全隊）

私は柳生さんの思い出として記憶に残ってるのが２つあります。一つは地区のふれあいクラブに囲炉裏がありまして、囲炉裏に炭を熾しまして囲炉裏を囲ってみんなで話し事をするんです。柳生さんが３月の寒い時期にそこに見えられ、「テーブルはよくあるけど炭を熾して囲炉裏でお茶をよばれる。こんな事は初めてだ」と大変喜ばれた事を覚えています。伊佐小学校は放鳥拠点から 200m 下に建っています。放鳥拠点の上に巣塔が建っている。そこにコウノトリが来ました。柳生さんが小学校の校舎に行かれ、「君たちは本当に幸せな子どもだよ。コウノトリの放鳥拠点を毎日見て人工巣塔に飛んでくるコウノトリも見れる。こんな所は何処に行ってもないよ」と生徒たちに話された。この２つが記憶として残っております。豊岡に来られたら帰りに必ず寄ってもらって本当に良かったなと思っています。

高木　一磨（伊佐環境保全隊）

司会　環境保全隊の活動の基本はコウノトリの保護ですが、そういう地域活動をずっと継続してされている地域は非常に少ないですね。最後は、田結地区のアンガールズの皆さん、よろしくお願いします。

島崎　百合子（アンガールズ）

田結のアンガールズと言います。お話を聞いてつくづくコウノトリというのは偉大だったなと思います。コウノトリが田結に平成 20 年に舞い降りてくれたことによってアンガールズという組織ができました。本当に人をつないでくれた鳥だったなと。柳生さんは豊岡に見えるたびに来てもらいました。この写真は、元役員の大島さんから提供してもらいました。田結湿地に見えたときに雨だったので、「今日は雨が降って申し訳ない」と言ったら、「湿地には雨が似合う」と言ってもらいました。

榎本　千秋（アンガールズ）

私はダンディーな柳生さんが好きです。これは人から聞いた話なんですけど、田結湿地を歩いて行って一番奥のカヤノっていうとこに行くんですけど、途中の道がすごく狭くて軽トラが一台通れるくらいの道なんですよね。そこを歩きながら「この道はケンドウなんですよ」というと、「それは良いことだ、犬が散歩するには良い道だ」と言われたらしいです。「そうじゃなくてこれは県の道なんです」と言ったらひどくビックリされたそうです。

島本　琴美（アンガールズ）

私たちの地区は柳生さんと直接関わってるわけじゃないんですけど、平成 23 年の 6 月に田結に来て頂いて。時間が無くて途中までしかご案内出来なかったんですけど、そこにお地蔵さんがあるんですけど、お賽銭を入れて長い時間手を合わせて頂きました。それがすごく印象に残っています。「今日は時間がないから帰らないといけないけど、次回はもっとゆっくり来たいですね」と。二回目に来られた時にはモリアオガエル（の卵塊）も見に行かれました。

島崎　百合子（アンガールズ）

この当時、田結地区はすごく盛り上がっていて、村の集会所で会食の会を設けて柳生さんに食べてもらいました。その時にたまたま窓が開いててツバメが入ってきたんです。とても感激されていたのを覚えています。ツバメのバッジも付けておられました。

中田　恵子（アンガールズ）

柳生さんは俳優もされながらコウノトリファンクラブ会長もされて、すごいなと思っていました。私はいつも人の後ろから付いていく方ですが、2008（平成 20）年にコウノトリが降りてきてくれたことが大事件でした。だから、私も微力ながら環境保全とまで行かないですけど湿地の整備をしなくてはならないなと、女の細腕でシャベルを持って頑張っています。

司会　あと、地区では三木地区では柳生さんを連れて行ったとき、蕎麦やおにぎりを出していただいて大歓迎してもらいました。参加してもらおうと区長さんに電話したんですが通じなくて出席がかないませんでした。百合地地区も関わりがあったんですが、あの当時の役員さんがみんな変わってて分かりませんでした。残念でした。その点、アンガールズや伊佐地区などはずっと変わらないですよね。本日の出席者も以前からずっと変わらない代わりに全員確実に年をとって、湿地づくりの現場づくりの現場でもハァハァ言うことが多くなりました。
濱田さんが、今来られましたので、早速お願いします。

濱田　健次郎（元コウノトリ文化館長）

私はコウノトリ文化館で勤務していたことがありまして、それでお呼び頂きました。ありがとうございます。柳生さんとはほとんど接触することがなかったんですが、ちょっとだけご縁がありました。あの方は手を広げると鳥のような格好をされる。その辺がすごいなと。あと、「豊岡」というアクセントを大事にされる。豊岡という地名のアクセントをナレーションでも大事にされた。ちょうど平成６年に但馬理想の都の祭典があったときに芦田伸介さんが「但馬」と「豊岡」のアクセントを大事にされてナレーションをされたんですが、やはり大物の方というのはそういったことを大事にされながらナレーションするんだなあと思いました。第４回のコウノトリ未来・国際かいぎの夜、写真がございまして今日はそれを紹介させて頂こうかと思います。国際かいぎの夜、「木箱」という居酒屋に柳生さんたちに付いて行ったことがあります。そこでは、奥田さんという学校の先生ご夫妻が結婚一周年で盛り上がっておられたんですが、柳生さんが入ってこられたので奥さんが感動され、柳生さんも結婚一周年の夫婦に感動されていました。次の写真には、なぜか私の息子が一緒に写っており、最後の写真には私が写っていて、やっとここで一緒いたという証拠です。

司会　読売新聞社の松田聡記者からメッセージを預かっていますので、日本コウノトリの会の森さんに読んでもらいます。

森　薫（日本コウノトリの会）

【初放鳥の直後、空を飛ぶコウノトリを見上げた柳生さん。「いかがですか？」と質問すると「おおお、あああ」と文字に起こせない声を出しておられました。感激で冷静に言葉に置き換える事が出来なかったのでしょう。記事にはできませんでした。何年かして、どこかの会議で柳生さんはおっしゃいました。「豊岡の連中、とんでもないことをしたよ」。これは非難する言葉ではありません。一度は自然界からいなくなったコウノトリを再び自然に戻すという、誰も成し得なかった快挙を試みた事への賛辞です。柳生さんらしい言葉遣いで褒めておられました。コウノトリがあちこちへ飛んで行き、柳生さんも豊岡のように野生復帰を目指そうとする場所で開かれるイベントに出かけられました。豊岡で行われている農業や地域づくりなどを笑顔で話されていた姿が忘れられません。そこには

日本野鳥の会の会長という役目からではなく、また長年培ってこられた俳優業の演技力からだけではなく、鳥や自然が好きな老人という思いが滲んでいたからこそ、聞く人を引き込む力があったんだと思います。

「松田、何やってんだ。こっち来いよ」。コウノトリ未来・国際かいぎのレセプション会場で、ニコニコしながら取材規制のロープ越しに話しかけたことがありました。私は取材だからロープを超えて入るわけにはいかなかったのですが、他社の記者が怪訝な顔をする脇で、大きな手で包み込むように握手をしていただき、そんなに面識がない私の名前を覚え、話しかけてくださったのが本当に嬉しかった。

いつまでもコウノトリ野生復帰に関わってくださる。当たり前のように感じられたのですが、亡くなられていまいました。残念です。当初は困難が予想されたコウノトリ野生復帰が予想を覆して順調に進んでいるのを見届けられたんでしょう。先に亡くなられた増井園長、池田研究部長、河合先生に、ビール片手に「いやぁ、コウノトリ野生復帰は順調に進んだよ」とニコニコして報告されているんではないでしょうか。

「たしかな未来は、懐かしい風景の中にある」。逆説の表現で理想を語られました。この言葉の通り、豊岡市だけではなく、隣の京丹後市や与謝野町などの川や田んぼなどでもコウノトリは昔のように集まり、見る者に何かを伝えています。残された我々は、コウノトリをはじめとする生き物たちが生きていけるよう努力しなければなりません。「豊岡の連中、とんでもないことをしたよ」から、「日本、いや東アジアのみんな、とんでもないことをしてくれたね」と褒めてもらえる日が来ますように】

以上です。

司会　ありがとうございました。森さん自身の想い出もよろしく。

森　薫（日本コウノトリの会）　私はハチゴロウの戸島湿地に勤めさせていただいて 14 年になります。柳生さんは、行政の方には時には厳しい言葉で叱責されていましたが、地域の方には温かい眼差しで接しておられました。私も励ましていただき、来られるたびに元気をもらっていました。個人的には手作りの鍋帽子（保温調理ができるもの）を柳生さんにプレゼントして使っていただけたことが、大きな励みとなってます。今年の春、石川県の河北潟で野生のコウノトリが繁殖しました。孵化には至りませんでしたが、柳生さんにヒナ誕生の報告が出来たら、きっとものすごく褒めてくださっただろうな。そんな姿を想像しながら、これからも頑張っていきたいと思います。

司会　最後になりましたが、中貝さんの奥さん、よろしくお願いします。

中貝　尚子

柳生さんが年に２回来られる時には私も声かけて頂いて食事をご一緒させてもらいました。最初の頃は一次会で帰ってたんですけど、途中からは「そろそろ帰りましょう」って言う役をするようになりました。本当に、長い間お付き合いさせて頂きました。こないだ「徹子の部屋」で今年亡くなられた方の特集で出ておられたんですけど、コウノトリのバッジを付けて出ておられたのが嬉しかったです。

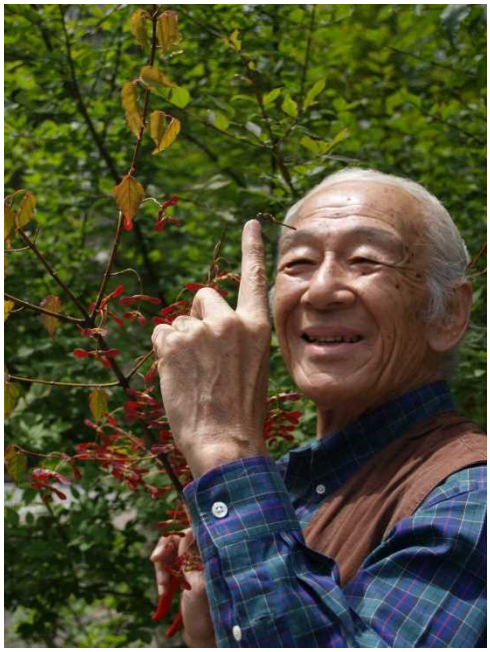
司会　　皆さん、ありがとうございました。大迫先生に締めをしてもらいましょう。

大迫　義人（コウノトリの郷公園）

みなさん、コウノトリ野生復帰はまだ途中です。先人が 1955 年からコウノトリの保護をやって 50 年、2005 年にやっとコウノトリを放すことが出来ました。これ半世紀ですよ。そこから 17 年経っていますがまだまだ未知、遠いです。僕らの手を借りなくても生きていけるかどうかってところは、まだまだサポートして行かないといけないと思ってます。それと全国のみなさんがコウノトリと一緒に暮らせていいねと思ってくれるようにならないと、コウノトリも安心して暮らせないと。それにはまだ 50 年くらいかかると思っています。
野生復帰の途中ということで、コウノトリの野生復帰、まだ道半ばです。これからも頑張っていくぞ。エイエイオー

柳生会長のことば

「たしかな未来は懐かしい風景の中にある」



一度絶滅させたコウノトリを再び野生に戻す。豊岡の皆さんがしようとしていることは、世界中から注目されています。この夢を実現するために、皆さんが地域をあげて行っている様々な努力には豊岡を訪れるたび、本当に感動させられます。

コウノトリが空を舞うのに障害となる送電線は地中に埋めようと試みる。餌となる田んぼの生きものを豊かにするために無農薬農法に転換し、休耕田といえども冬期湛水を欠かさない。農水路と田んぼを結ぶ魚道を設け、国土交通省まで巻き込んで河川整備に自然復元型工法を採り入れた。そして、コウノトリが営巣するための雑木林･里山の復活にも取り組む･･･。

人と生き物が一緒に暮らしていた、かつての風景を取り戻すために、私たちがしなくてはならないことは、こうして自分にできることは何でもやろうという情熱です。

地域を挙げた挑戦。子どもたちも田んぼの生き物調査に精を出します。６月初めに水を落とせと教えたかつての農業指導を改め、６月下旬まで湛水することで、トノサマカエルが繁殖。そのおかげで稲の大敵カメムシがいなくなりました。そして、カエルをコウノトリが食べる。豊岡の子どもたちは、自分の目で見て、自分の体験として、そういう生命の循環や自然の知恵を身に付けています。

やがて、豊岡の取り組みは全国へ拡がるでしょう。日本中でコウノトリが棲める田んぼや里山を復活させる。それを今の子どもたちに引き継ぐ、そんな未来を私は夢見ています。

「たしかな未来は、懐かしい風景の中にある」と思います。これからも素晴らしい環境づくりにみんなで取り組んでいきましょう。

2008 年 Vol.14 会報春の号「柳生会長インタビュー」より

写真コンクール歴代最優秀賞作品

柳生会長は、第１回から第 17 回まですべての審査に携わり、毎回熱心に審査をされていました。最優秀賞に選ばれた写真の数々をご紹介します。

第１回『巣作りに励むハチゴロー』

第２回『行進だぁー』

第３回『お父さんおかえり』

第４回『みんなで生態観察』

第５回『仲間に入れて！！』

第６回『巣立ちの雛に見えたもの』

第７回『明日への絆』

第８回『師走の好日』

第９回『ラージヒルジャンプ』

第 10 回『花火見物』

第 11 回『みんな友達』

第 12 回『帰巣』

第 13 回『星の綺麗な夜』

第 14 回『歓声』

第 15 回『こうのとり正月御挨拶』

第 16 回『Life or death（生か死か)』

第 17 回『富士見の巣作り』

Fly to the wild

たくさんの思い出をありがとうございました。

コウノトリファンクラブ一同

発行日：2022 年(令和４年 12 月 12 日)